

## 令和6年度 高等学校内部入学式・第1学期始業式 式辞

先ず始めに、先ほど本校高等学校への入学を許可した高校1年生158名の皆さん、入学おめでとう。小・中学校の9年間の「義務教育」を終え、今日から高校生です。出席日数や考査成績の重要度など、中学のときとは大きく異なることとなります。自ら学ぶ姿勢を大切に、意欲的で充実した高校生活を送ってください。

さて、今年の本校の桜は、新年度のスタートと合わせて一気に咲き始め、まもなく満開を迎えます。この時期は、生徒の皆さんも先生方も、「行く人、来る人」が交錯し、何となく落ち着かないものです。その一方で、私は毎年、新たな気持ちで緊張感を感じながら、身の引き締まる思いで新年度を迎えてきました。皆さんはどうでしょうか。3学期終業式での約束どおり、昨年度の反省を踏まえて、自分にとっての最善策を考えながら、決意も新たに今日を迎えてくれていることと思います。

君たちには、それぞれが学びたいこと、身につけたいこと、実現させたいことがあります。それらを必ず達成するんだという強い意志をもって、今年度の学校生活に臨んでくれることを期待しています。お互いに「意志あるところに道は開ける」という言葉を信じ、先をしっかりと見据えて、毎日を大切に過ごす一年にしていききたいものです。

さて、先日4月1日で能登半島地震からちょうど3ヶ月が経過しました。3月29日時点で、能登半島地震による死者は244人、住宅への被害は県全体で7万5441棟に上り、約7860戸で断水が続き、今もなお8109人の方々が避難生活を余儀なくされています。

そうしたなか、大きな被害が出た石川県北部の輪島市、珠洲市、能登町、穴水町のいわゆる奥能登4市町では、公立小中学校の在籍者数が地震前に比べて大きく減少しています。校舎自体が損傷したり、いまだ避難所として使われていたりする学校もあり、地元以外への転校を決めた人も多くいます。

地震前の昨年12月、4市町の公立小中の在籍者数計2097人が、4月1日時点で計1577人と520人が転校し、全体の約25%在籍者数が減少しています。

最も減り幅が大きいのは輪島市で、12月時点の1100人（小学校699人、中学401人）が689人（小学校402人、中学287人）と、37%減。建物の損傷などで校舎が使えない6つ小学校の児童は当面、市立輪島中学校で授業を受けることになるようです。

なかには、小学3年生になる兄は友達と離れたくないということから地元に残り、新たに小学1年生になる妹は地震の怖さから金沢市内の小学校に入学するという結論を出された家族もおられます。その親御さんは「本当は家族一緒がいいけれど、子供たちの気持ちを考えたら一時的に別々になるのは仕方ないなあ」と語っておられました。

3月1日には、石川県内でも公立高校の卒業式が行われました。卒業生それぞれが様々な思いを語りながら、新たな一步を踏み出したようです。その思いを少し紹介させてもらいます。

「ある人は避難所で暮らし、停電や断水、家屋の倒壊、身近な人との別れを体験した。強く能登の復興のために立ち上がろうと心に刻んだことは、これから社会の荒波の中に出ていく上でとても大切な試練だった。能登は決して負けません。」

「能登の病院や施設では、スタッフが被災者となりながらも患者や利用者に寄り添う姿があった。自分たちが進もうとしている道は、このように厳しく、けれども何事にも代え難い仕事であることを感じた。」

「災害という恐るべき力の前に屈し、人間という存在の小ささを知ったが、助け合うことの大切さを学び、家族や友達との絆の強さを再確認した。」

また、珠洲市にある飯田高校では、学校の正門が崩れ、棟続きだった校舎と体育館は、つなぎ目が割れ、体育館も使用できる状況ではありません。グラウンドは亀裂が入り、とても人の手で直せるレベルではなかったようで、野球部が練習を再開できたのは3月になってからだったそうです。それまで部員は土曜・日曜は復興ボランティアに参加していたとのこと。

飯田高校を卒業した女子生徒は

「医者になって戻り、地元によくしたい。地震が起きて、絶対に戻ってきて地元に戻したいって思いが強くなった。」と語っていました。

また、卒業式の卒業生答辞では代表の男子生徒が、

「変わってしまった町並み、水道・電気などが使えないといった、経験したことのない生活にとっても不安になった。」と振り返り、「一番影響を受けたのは、一般入試を控えていた受験生だ。環境が変わる中、困難に負けず目標に向けて支え合いながら、ひたむきに努力している姿は、とても頼もしかった。」と友達を讃えていました。

私が若い頃、「人は『大変だ！ 大変だ』』と思っているときこそ、『大きく変われるときだ』』と、先輩の先生から言われたことがあります。

震災に遭われた人々の言葉を聞いていると、本当に苦難のなかで大きく変わらざるを得なかったんだなと感じ、胸が熱くなります。

君たちも含め、全国の小・中・高校生、大学生、私たち大人も、それぞれの立場で、それぞれの4月、新年度、新学期を迎えました。

今年度一年、それぞれに与えられた時間は平等です。一日24時間これも平等です。授業などで拘束される時間もありますが、その時間も含めて何を考えて判断し、どう過ごすかは一人一人に委ねられています。

最後に本校は今年度創立46年目を迎えます。創立50周年が近づいてきました。これまでの積み上げられてきた一年ずつは、在籍した生徒の皆さん、先生方の様々な取組が実績となり、本校の歴史となっています。そうした意味からも、君たち一人一人の学校生活が創立50周年という節目に向けた歴史となっていくことを心にとめてくれればうれしく思います。

君たちは今、自分自身のかげがえのない人生を歩んでいます。少し先を見据え、先生方と力も借りながら自分の進むべき道を拓き、より豊かなものに創造する一年であることを期待して私の話は終わります。

以上